

誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育てるために



未来 Watch

つらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育てるコミュニティ...

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

スマホで読める、感動のコラム!



両腕いっぱいのカーネーション

前途に立ちだかる未開の原野。その原野を切り拓かんと、立ち向かう心を燃やす開拓者。未だ経験したことのない...

続きはこちらから



教育支援員

私の家では、登校する子どもたちの歓声が毎日聞こえてきます。その度に思うのは、「どんな状況下でも、子どもたちが...

続きはこちらから



ニッケ教育研究所のホームページを、是非ご覧ください!
<https://nikke-edu.org/>

一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけますか？子どもたちは“未来の宝”です。私たちが発信する未来の宝を育てる情報を、学校・家庭・地域で是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

何か新しいことができるようになるためには、そのことについての「知識を得る」ということと、得た知識を使って「自分でやってみる」ということが必要です。自分でやってみると、最初は思ったようにできなかったり、そもそも知識の理解が間違っていたりすることもあります。「やってみる」ことでいろいろな気づき生まれ、自分で考えて続けていくうちに段々とできるようになっていきます。この段階では上手くいくことよりも失敗することの方が多く、周りから笑われたりしないという心理的に安全な環境を作ることが重要だと思います。子どもたちが、自分の考えたことをやってみる、自分の思ったことを言ってみるということを、自然に行えるようにすることが大切です。そのような経験を積み重ね、自分らしく育ちゆく機会と環境を整えたいと考えます。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長 楠本 景央



2022 夏号 (年 4 回発行) No.10
2022 年 7 月 20 日 発行
本誌掲載の記事は、複写・複製・転載を禁じます。

《発行》 一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町 3 丁目 3-10
TEL: 06-6205-6665 <https://nikke-edu.org/>

特集

私がつくる子どもの笑顔 第6回

いつも・そこが・じぶんの居場所
い・そ・じ

連載コラム 第2回

学校グランドデザイン

— 家庭と地域をつなぐ学校づくり —

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ



※写真は、布引高原(福島県郡山市)です

学校グランドデザイン

— 家庭と地域をつなぐ学校づくり —



《ニッケ教育研究所顧問》 かつもと たかお 勝本 孝夫
元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

ふりかえり

世の中では考えてもいなかった出来事が次々に起こり、私たちはさまざまな試練や困難に直面しています。変化のスピードが速く予測が難しい時代ですが、だからこそ、いかなる状況にも微動だにしない学校づくりに取り組む必要性が、いや増しているのではないのでしょうか。

そのときの一助となる学校グランドデザインについて、作成例（大阪市）を参考に4回にわたり掘り下げていきます。前回春号掲載の①に続き、今回は②について述べさせていただきます。

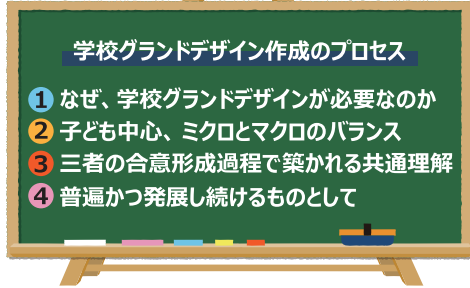
2 子ども中心、マイクロとマクロのバランス

学校グランドデザインとは、学校における教育活動の全体構想を表したものです。ゆえに、学校グランドデザインを作成するにあたっては、現実の教育課題にフォーカスしたマイクロ的な視点と、それに関連する事柄までも俯瞰して捉えるマクロ的な視点が必要です。これら2つの視点を持ちながら、学校グランドデザイン作成のための3視点である、「**簡潔明瞭化**」「**視覚化**」「**構造化**」を念頭に置いて項目内容を検討していきます。

「学力・体力・心の力」の育成

まずは、教育現場の喫緊の課題のひとつである、「学力・体力・心の力」の育成について掘り下げていきましょう。この3つの力の育成を考える時、担任時代に巡り合った3人の子どもの様子が、今でも鮮明に蘇ってきます。

Aさんは何事にも興味・感心を示し、学習に対する意欲は大いにありました。しかし、なかなか自信を持って、周りの子どもたちの視線を気にしすぎない内向的な子でした。そのため、しばしば心が不安定になって、学校を休みがちでした。Bさんは身体能力がずば抜けており、体育の時間では、その派刺とした動きにクラスのみならず絶賛を受けていました。しかし、自分の感情を抑えきれない面があり、クラスの子とのいさかいは絶えませんでした。Cさんは心やさしい穏やかな子で、周りにはいつも多くの友だちがいました。しかし、自分の意見をはっきりと言うことができないために、友だちからの誘いを断りきれずに悩むことが多かったのです。この3人をどうして忘れられないのか。それは、「学力・体力・心の力」それぞれの力を育みつつも、そのバランスの必要性を痛感したからです。

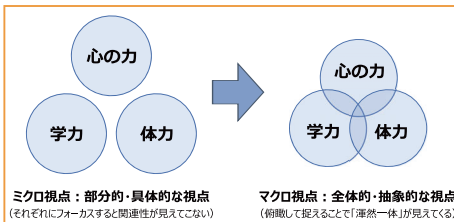


この段階で気をつけたいのは、目の前の課題解決に意識が偏ってしまうと、現実的ではあっても学校が目指す大きな方向性を見失う恐れがあるということです。また同時に、未来展望に意識が偏ってしまうと、理想的ではあっても現実課題の解決方法を見出せなくなります。**子ども第一を中心に、マイクロとマクロのバランスを保つ**ことが大事になります。



小学校の6年間で子どもたちはこれら3つの力を身につけていくのですが、マイクロ視点では、とすると、それぞれがバラバラな単独のものとして捉えられてしまいます。しかし、マクロ視点になると、3つの力が重なり合っていることが見えてきます。つまり、学力には体力・心の力の領域が、体力には学力・心の力の領域が、心の力には学力・体力の領域が重なり合っていることがわかります。まさに、**3つの力が渾然一体となっている**のです。

「学力・体力・心の力」の相関関係



習得すべき力は「レジリエンス」

教育の現場においては学力や体力を数値化し、順序をつけて評価せざるを得ません。しかし、子どもたちが「未来を切り拓いていく」ために必要な学力・体力を育成するとの視点に立った時、心の力（豊かな心）と関連する中で捉える必要があると感じました。そうすることで、**普段見えていないところを拾い上げていくことができる**からです。この3つの力が重なっている部分こそが、子どもたちが6年間で習得すべき力です。それを、「立ち向かい、乗

いじめ・体罰の根絶に向けた「教職員の資質向上」

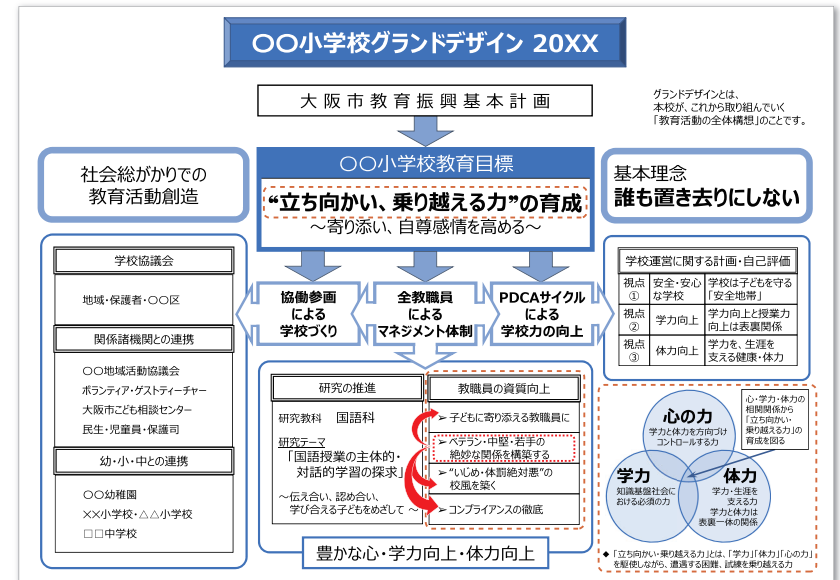
もうひとつの喫緊の課題である、「いじめ・体罰の根絶」について掘り下げていきましょう。ここでは、「**いじめは絶対悪**」という意識の確立に絞り込むことが重要です。それができれば、必然的に「体罰の根絶」も達成されるからです。いじめを受けている子に対して寄り添っていくのは当然なことで、マイクロ視点に立った行動と言えます。そして同時にマクロ視点に立つと、家庭・学校・地域が「望ましい教育環境」にならないといけないという思考が生まれてきます。なぜなら、「子どもは親の鏡・子どもは社会の鏡」と言われるように、どんな時もどんな時代でも、おとな社会から影響を受けるのが子どもたちだからです。この、「望ましい教育環境」構築のためには、「**教職員の資質向上**」が重要になってきます。家庭と地域が進むべき方向を示す「キーステーション」の役割を、学校が担って

り越える力”の育成)として学校目標に掲げました。東日本大震災をきっかけに注目されている、「**レジリエンス（困難を乗り越える力）**」の育成です。その上で、学力向上に取り組む中では、「人権教育」と「道徳教育」とを絡め、「学習への意欲喚起」を図っていく方策を探索する必要性をますます痛感しています（「未来Watch」2021冬号で言及）。

いるからです（「未来Watch」2021春号で言及）。教育全体の流れを踏まえながら地域の現状・特質を生かすために、学校が果たす役割は極めて大きいのです。「教職員の資質向上」の4事項の中でも、とりわけ「**ベテラン・中堅・若手の絶妙な関係を構築する**」ということが重要です。ここで示す「絶妙な関係」とは、「教職員一人ひとりの特性や持ち味を生かしながら、同じ方向を向いて歩んでいく…」 「子ども第一」を中心に据えて皆で共通の目標を持つ…」ということ（ホームページコラム2022.4.27に掲載）。この絶妙な関係の構築が、「子どもに寄り添える教職員に」「いじめ・体罰絶対悪」の校風を築く「コンプライアンスの徹底」を実現するための大前提になるのです。つまり、「いじめ・体罰の根絶」のためには、「教職員の絶妙な関係」構築がカギを握っているのです。

学校グランドデザインの作成例（大阪市）

※ 過去の作成例です。表中の点線・赤の矢印は、実際のものにはありません



“多様性尊重”が求められる時代を迎えて

絶妙な関係構築は、性別や年齢、人種や国籍等の“違い”を乗り越える。“多様性尊重”の精神と響き合っていると思えてなりません。教育現場の和気あいあいとした“麗しい教職員

仲間の姿”は、お互いを理解して尊重し合い、家庭・地域とともに“時代を切り拓いていく姿”であると言えるのではないのでしょうか。

私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざして、現場ではさまざまな創意工夫が行われています。「私がつくる 子どもの笑顔」では、現職の校長先生に学校づくりの考え方や具体例を紹介していただき、子どもたちを育む学校環境についての意識を深めていきます。
第6回は、大阪市立磯路小学校の糸井利則校長です。

第6回 いつも・そこが・じぶんの居場所 い・そ・じ

《大阪市立磯路小学校》 いとい としのり 糸井 利則 校長

35才で大阪市の教員になりました。それまでは海外を旅して暮らすフリーターを続け、帰国しては小中高の講師をしていました。その時の経験から得た自由な発想や、多様性を認める生き方は、この25年間の教員人生に大きく影響しています。校長先生は「今日も絶好調!」です。



校長先生は YouTuber

2020年3月、前任の敷津小学校でコロナ禍による「一斉休校」の非常時が始まりました。休校中の子どもたちに声を届けたいという思いでYouTubeでの動画配信を始めたところ、それがメディアに取り上げられ、「YouTuber校長」と命名されました。しかし、その翌月に転勤。新天地、磯路小学校ではいきなり「入学式延期」に、始業式もなく「休校の新年度」を迎えることとなり、再び動画配信を始めました。まだ見ぬ子どもたちに向けて、毎日、ミニ授業の小ネタを考えましたが、一本作るのに7~8時間かかることも…。一方、担任の先生たちは自宅学習用の教材を作り、それを各家庭に届け、プリント回収・丸つけ

といった家庭訪問の日々を送っていました。子どもたちと初めて出会ったのは「分散登校」となった5月13日。その瞬間を、ABCテレビの報道・情報番組「キャスト」(※)のカメラが捉えてドキュメンタリー映像が制作され、シリーズ「苦難の時こそ」で紹介されました。そのなかで、教師は「子どもを傷つけているかも知れないという大前提を持っていないと怖い仕事」という私自身の心構えにも触れられていますので、特に若い先生方に観ていただければと思います。

※ 2022年3月30日で放送終了。



全校児童文集『磯路の子』の創刊と継続

転勤してすぐ、休校中ではありましたが、新年度の研究について研究主任から相談がありました。本校は、研究主題「主体的・対話的に深める『書くこと』の学び」のもと、国語科「書くこと」の研究を始めようとしていました。そこで、前任校で7年間発刊してきた全校児童文集『敷津の子』を見せたところ、研究主任の目が輝いたのです。

さっそく文集づくりをスタートしましたが、1年目は、初めて全校文集を出す「生みの苦しみ」がありました。一人一台端末の導入に伴い、原稿用紙を使わずにパソコン入力しました。その際、低学年は原稿用紙に書き、それを高学年が入力していきま。教える方も初体験だったので校正に時間がかかり、『磯路の子』第1号が完成したのは卒業式直前でした。2年目は、作文指導の年間計画策定、執筆週間の設定、ドライブ内でのデータ共有、タイムスケジュールと進捗状況の確認等、研究主任を中心に業務の「見える化」を図りました。3年目の今年度は、3年間分の学びを分析して、児童の作文力の「伸び」を見取ることをサブテーマにしました。記憶は消えても、記録は残る—— 教職員が入れ替わっても、『磯路の子』が持続可能なものとなるよう見届けていきたいと思。



子どもたちの感想

『磯路の子』の文集づくりをすると、作文を書くのが好きになったり、他にも、友達の作文を読むことによって読書も少しだけ好きになったり、書くということの能力が上達するので、『磯路の子』という1冊の本は必要だと思います。それに本なので、夢がかなったりした場合などものすごく成長している能力や、他のものも見返しができるので、ほくが大人になってもみんなのために、『磯路の子』というものを続けてほしいです。(4年生)

「校長先生のお話」メモ

校長になって7年目、ずっと続けていることがあります。それは月曜日の児童朝会后、そこでの「校長先生のお話」について全校児童に書いてもらうことです。

「なんのおはなしてですか?」 —— (題名)
「どんなおはなしてでしたか?」 —— (要約)
「どうおもいましたか?」 —— (感想)

それらが校長室に届けられると、すべてを読んで赤ペンで◎をつけています。また、たくさん書けた子、キラリと光るコメントを書いた子たちの文章を「校長通信」で紹介し、フィードバックしています。

4月はじめには、オンライン児童朝会で『教室はまちがうところだ』の絵本の読み聞かせをしました。その時の子どもたちの感想を紹介します。

子どもたちの感想

きょうしつはまちがえるところ。しっばいしてもいい。きょうしつはなんどもまちがえてもいい。手をあげてしっばいしてもいいってことがわかりました。(2年生)

有言実行「毎朝の校区巡視ラン」

2020年12月—— 師走を迎え、1年が終わろうとしていた時、新しく来たこの学校でPTA・地域行事が一切なく、この磯路の町のことを何も知らないまま時間が過ぎていくことにあらためて気づきました。桜まつりも、三社神社の夏祭りも、何も知らずに1年が過ぎようとしていたのです。その時、ふと、「磯路地域を知ろう、毎朝、校区を走ろう」と思い立ちました。

12月18日より、朝7時半ごろから30分間程度の校区巡視ランを始めました。そして年が明けて3学期の始業式。子どもたちに「一年の計は元旦にあり」の話をし、「毎朝、磯路の町を走ります! 雨でも走ります!」と宣言しました。校区巡視ランは今も続いていて、1年半が過ぎましたが1日も欠かさず走り続けています。その時の宣言は、「子どもたちと約束したから裏切るわけにはいかない」と自分を追い込んでのきっかけづくりだったのです。

走り始めた頃は、道行く人たちに「おはようございます」と声をかけると、不審者を見るような視線が返ってくることも

おわりに

22世紀になり、今の子どもたちがひ孫たちに語っているかも知れません。

—— おばあちゃんの小学校の時の校長先生はなあ、「毎朝走る!」言うてみんなに宣言しはって、それからは雨の日も暑い日も寒い日も走って、集団登校を見守ってくれてはったんや。今でも、「有言実行」で言葉聞いたら、あの校長先生のこと、思い出すなあ。生きてはったら140才ぐらいかな。(笑) ——

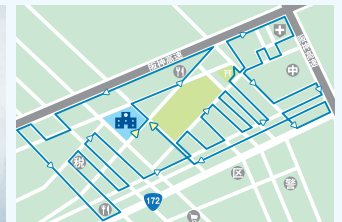
はっぴょうでまちがえたからってその人をせめるのはダメ。まちがえてもみんなで答えをさがし出す。そうすればまちがえた人もすっきりする。まちがえた人をせめて、みんなですぐあえる、そんな学校にしていきたい。(3年生)

教室はまちがうところだ。とにかくまちがっていいから手をあげる。自信がないのは、まちがいをおそれているから。自分が思ったことがまちがっていても「意見」をもつことが大事。まちがうから、新しいすてきな自分の考えをもつことができる。(4年生)

教室でまちがってかしくなる。そこにたどり着くには時間がかかる。まちがえるとだれかしら笑ったり、「えっ」と言う。だから自信がもてない。笑わないこと、「えっ」で言わないことを意識しないとけない。そう言われたら自然にできると思う。(5年生)

教室で発表する時、まちがえをおそれて手をあげないよりも、まちがえてそこから答えを見つけることが大切。もう一つ大切なことは、まちがえたらその後、どうしてまちがえたかを考えることでさらにのびると思います。(6年生)

校長先生絶好調!
校区巡視ラン
6月1日(水)
357日
5.89 km
累計 1328.36 km



ばしばありました。しかし今では、「あの、毎朝走っている元気なおっさん、小学校の校長先生やて、知ってた?」が都市伝説化して広がっている実感があります。また、「校長先生! 今日はいらいゆつりやなあ。昨日飲み過ぎたんちゃうか?」と声をかけられることもあります。公営住宅に向かって大声で挨拶をすると、あちこちから「校長先生!」と掛け声が返ってきます。この街に溶け込んできた感じがしています。

走る広告塔として、登校時の守護神として、磯路を離れるその日まで走り続けます!

糸井校長先生のYouTube動画をスマホから!

【YouTuber校長】

休校中の子どもたちへ!ユニークな校長先生の素顔「苦難の時こそ」ABCテレビニュース

【YouTubeチャンネル】

休校中の子どもたちに向けて配信された、ミニ授業の数々! かつからボイスは20本の動画



※ 広告動画が再生される場合があります